

中 臣 遺 跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

中 臣 遺 跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび宅地造成に伴う中臣遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

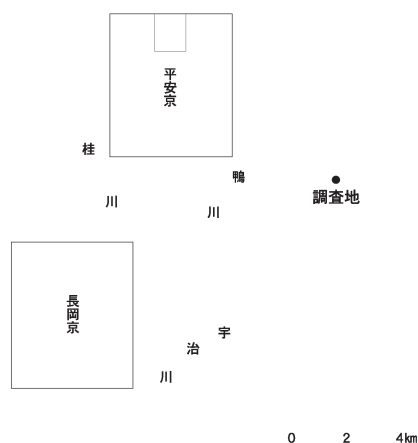
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 9 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 中臣遺跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市山科区東野舞台町 97 番 6 |
| 3 委 託 者 | 葵建設株式会社 代表取締役 長濱友也 |
| 4 調査期間 | 2006 年 6 月 19 日～ 2006 年 7 月 24 日 |
| 5 調査面積 | 400 m ² |
| 6 調査担当者 | 菅田 薫 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「山科」「勸修寺」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 図 2・3 は調査担当者が、それ以外は村井伸也・幸明綾子が撮影した。 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 本書作成 | 菅田 薫 |
| 17 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・山口 真・吉本健吾 |



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	3
(1) 層序	3
(2) 遺構	7
4. 遺 物	10
5. ま と め	12

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査区全景（西から）
		2	掘立柱建物 77（東から）
図版2	遺構	1	調査区東端全景（西から）
		2	溝 211（北から）
		3	溝 211 断面（南から）
図版3	遺構	1	竪穴住居 99（南から）
		2	掘立柱建物 269 と火山灰検出状況（北から）

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：5,000）	1
図 2	調査前全景（東から）	2
図 3	作業風景（西から）	2
図 4	調査区配置図（1：500）	2
図 5	遺構平面図（1：200）	4
図 6	北壁断面図（1：80）	5

図7	掘立柱建物 267・268、柱列 266 実測図 (1 : 80)	6
図8	掘立柱建物 269、柱列 270 実測図 (1 : 80)	7
図9	掘立柱建物 77 実測図 (1 : 80)	8
図10	竪穴住居 99 実測図 (1 : 40)	9
図11	溝 211 出土土器実測図 (1 : 4)	10
図12	竪穴住居 99 出土土器	10
図13	石製品	11
図14	石製品実測図 (1 : 3)	11

表 目 次

表1	遺構概要表	3
表2	遺物概要表	10

中臣遺跡 83 次調査

1. 調査経過

調査地は山科区東野舞台町にあり、中臣遺跡の北東に位置する。当該地において宅地造成工事が計画されたため、京都市文化市民局文化財保護課が試掘調査を実施したところ、柱穴や竪穴住居とみられる土層を確認した。そのため、それらの遺構の性格を明らかにするために発掘調査を実施することになり、文化財保護課の指導の下、当研究所が発掘調査を実施した。調査範囲は、道路予定地部分を対象とし、幅 6 m、長さは南北が約 25 m、東西が約 33 m の T 字形に設定し、隅きり部分も調査の対象とした。

調査地は、東側に市道御陵六地藏線（通称西野道）が南北に走る。調査地側は、約 0.6 m の段差があり道路面より高く、宅地として使用されていた。中臣遺跡北東部に位置する当該地付近の調査例は、南西側に位置する丘陵頂部にあたる 73 次調査がある。縄文時代晩期から室町時代にいたる各時代の遺構・遺物が出土している。また、調査地南方での山科川河川改修、道路拡幅、市営住宅建て替えなどに伴う発掘調査でも多くの成果があがっている。

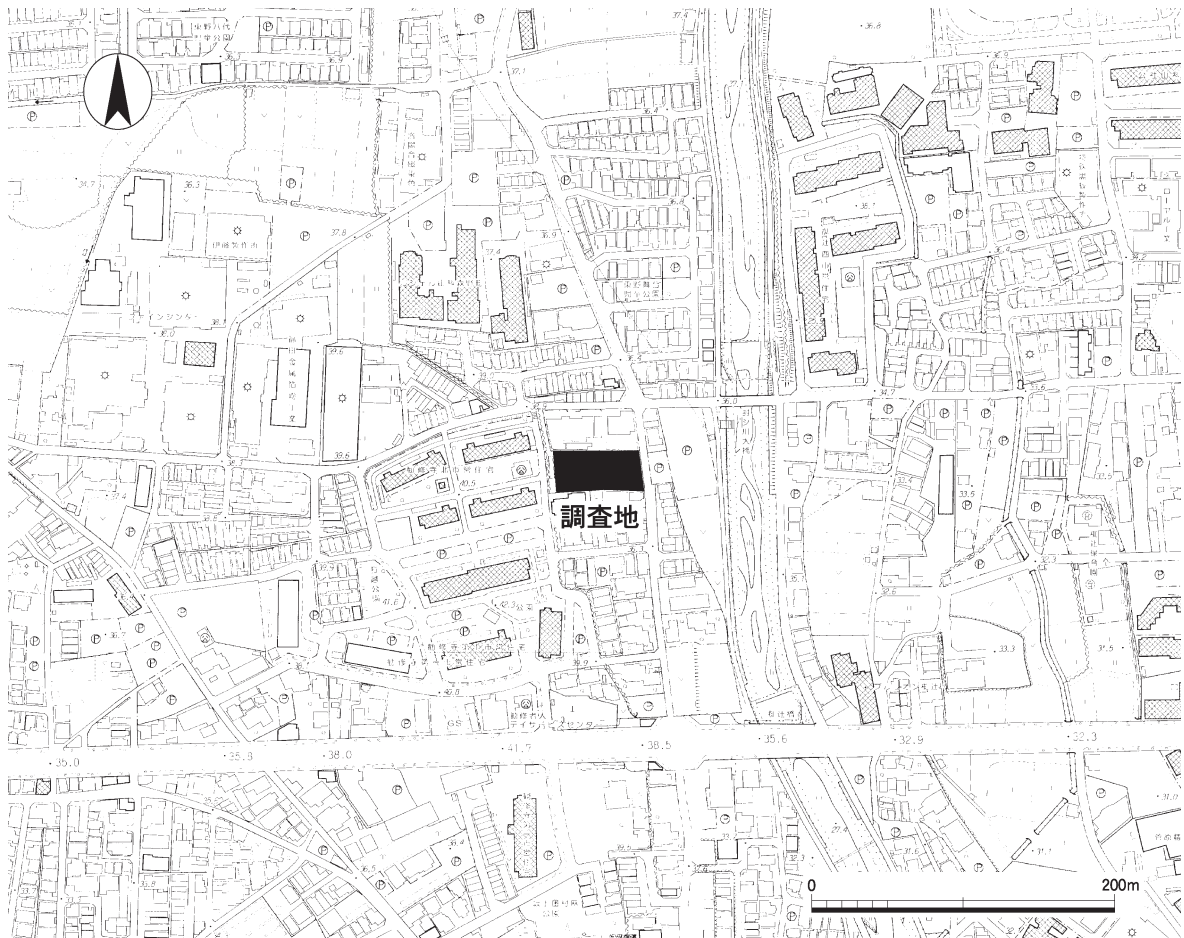


図1 調査位置図 (1 : 5,000)



図2 調査前全景（東から）



図3 作業風景（西から）

2. 位置と環境

中臣遺跡は山科盆地の南端、山科川と旧安祥寺川が合流する地点の北に広がる通称「栗栖野丘陵」と呼ばれる台地上に立地する遺跡である。この栗栖野丘陵は、遠方からみると馬の背中に似ていたことから、「馬背坂」とも呼ばれる。征夷大將軍坂上田村麻呂の葬儀は宇治郡栗栖村の、馬背坂で営まれたといわれ、ほぼ遺跡の中心にある將軍塚が田村麻呂の墓ともいわれている¹⁾。中臣遺跡の北側には、室町時代に建立され、廃絶した山科本願寺が所在する。また遺跡の東側、山科川をはさんだ丘陵上には、飛鳥から奈良時代の寺院跡、大宅廃寺が所在し、平城京と大津を結ぶ幹線道路である「奈良街道」を東に望める位置に中臣遺跡は立地している。

中臣遺跡の調査は、1971年民家新築に伴う約100㎡の調査を第1次調査として行われ、弥生時代Ⅱ様式の方形周溝墓・壺棺、古墳時代後期の横穴式石室と周溝を検出した²⁾。以降、1976年3月末の第6次調査までは、調査団により、区画整理事業に伴う市街化道路部分に限って調査が行われた³⁾。同年秋以降は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所の設立により、当研究所が調査を引き継いだ³⁾が、同時に市街化道路の整備に伴い、この年から宅地開発による発掘調査も激増し、今回

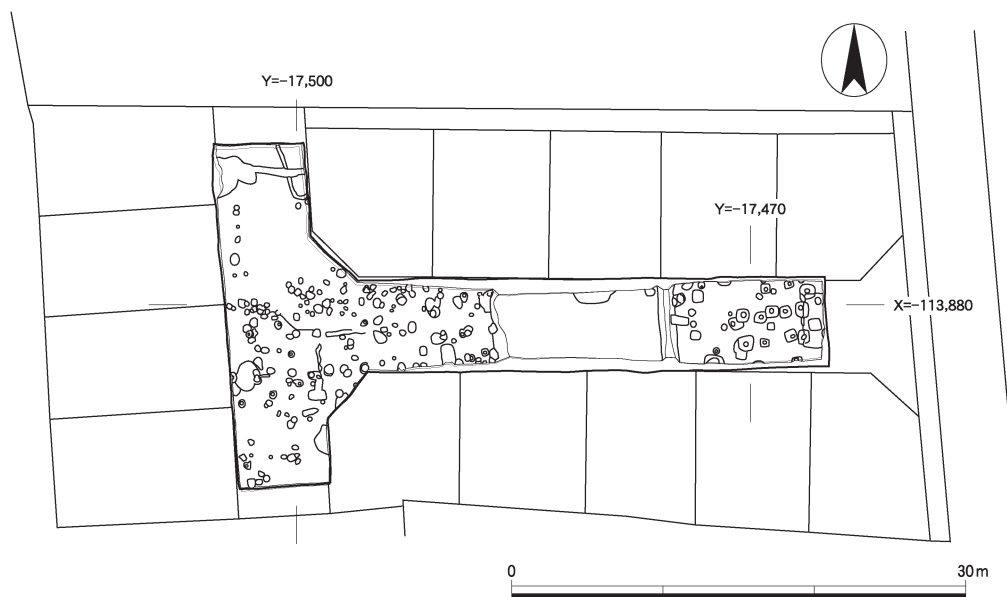


図4 調査区配置図（1：500）

の調査で 83 次となる。

中臣遺跡は旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代と続く複合遺跡として知られ、今回の調査地でもある山科川に面した遺跡の東側は、中臣遺跡の中でも特に遺構密度の高い地域である。

3. 遺 構

(1) 層序

調査地の現地表の標高は西側で 37.8 m、東側で 36.7 m を測り、約 1 m の高低差がある。調査地の層序は、西側の南北トレンチと東側の東西トレンチとで異なった堆積をしている。南北トレンチでは表土直下に、地山である 5Y5/3 灰オリーブ色砂泥が堆積する。この層は北に向かい礫の包含が多くなり、調査区の北西部では砂礫層（φ 5 ～ 30 mm）になる。

東西トレンチのほぼ中央部に、旧屋敷地内にあった池があり、約 15 m にわたり攪乱を受ける。攪乱の東側は、表土層下に南北トレンチでみられた地山と同色の灰オリーブ色砂泥層が黒色砂礫層をはさみ、0.6 ～ 1 m の厚さで検出される。当初、この層の上面を遺構面と考えて調査を進めたが、この層は池を開削するとき、池の東西にあった高低差を同じにするために池の東側に行った盛土であった。盛土層以下、20 層黒褐色砂泥、21 層黒褐色混礫砂泥（φ 30 mm の礫・炭混）、22 層黒褐色砂泥（φ 15 mm の礫・炭少量混）、23 層黒色砂泥、24 層オリーブ黒色砂泥、25 層黒色砂泥（にぶい黄褐色粘質土ブロック混）と順次堆積する。地山の 26 層はにぶい黄褐色粘質土である。20 層は旧耕作土とみられ、近代の染付・陶磁器が出土する。21・22 層には平安時代から鎌倉時代の遺物が含まれる。24・25 層からは縄文時代後期から弥生時代の遺物が出土した。Y=-17,487 から Y=-17,493 ラインにかけての段丘斜面では、28 層灰黄褐色砂泥の中に、火山灰がブロック状に混在していることを確認した（図版 3）。火山ガラスの観察から、始良 TN 火山灰とみられる。

遺構は南北トレンチでは地山層の 27 層灰オリーブ色砂泥～砂礫上面で、東西トレンチ西側では 28 層灰黄褐色砂泥（火山灰ブロック混）上面で、東側では 24 層オリーブ黒色砂泥上面で検出した。

遺構面の標高は南北トレンチで約 37.3 m、東西トレンチの東側で約 35.0 m である。

(2) 遺構

検出した主な遺構は、古墳時代の竪穴住居 1 棟、古墳時代および平安時代から鎌倉時代とみら

表 1 遺構概要表

時 期	遺 構	備 考
古墳時代	竪穴住居99、掘立柱建物77、柱列270	
平安時代～鎌倉時代	溝211、掘立柱建物267・268、柱列266	
時期不明	掘立柱建物269	

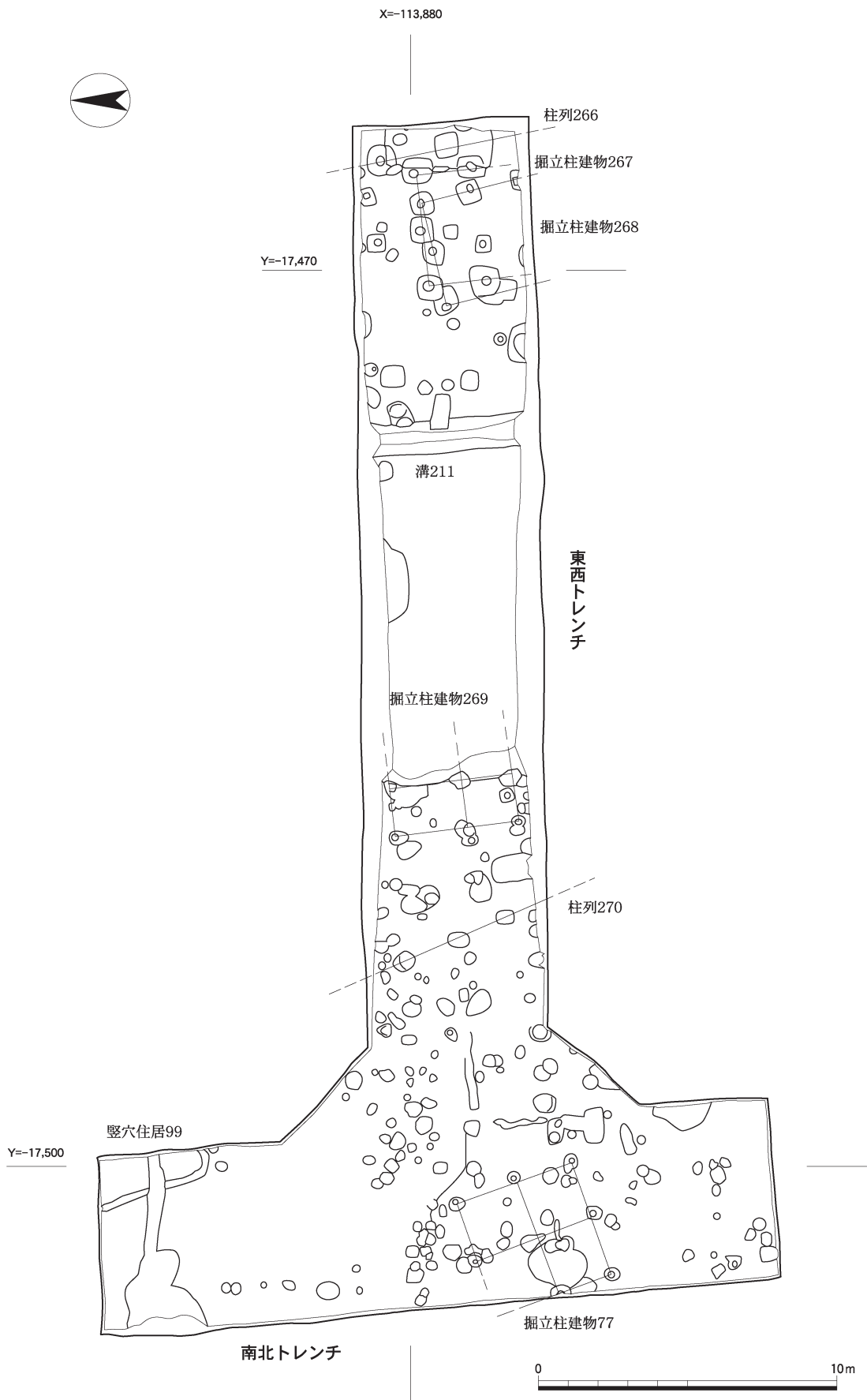


図5 遺構平面図 (1:200)

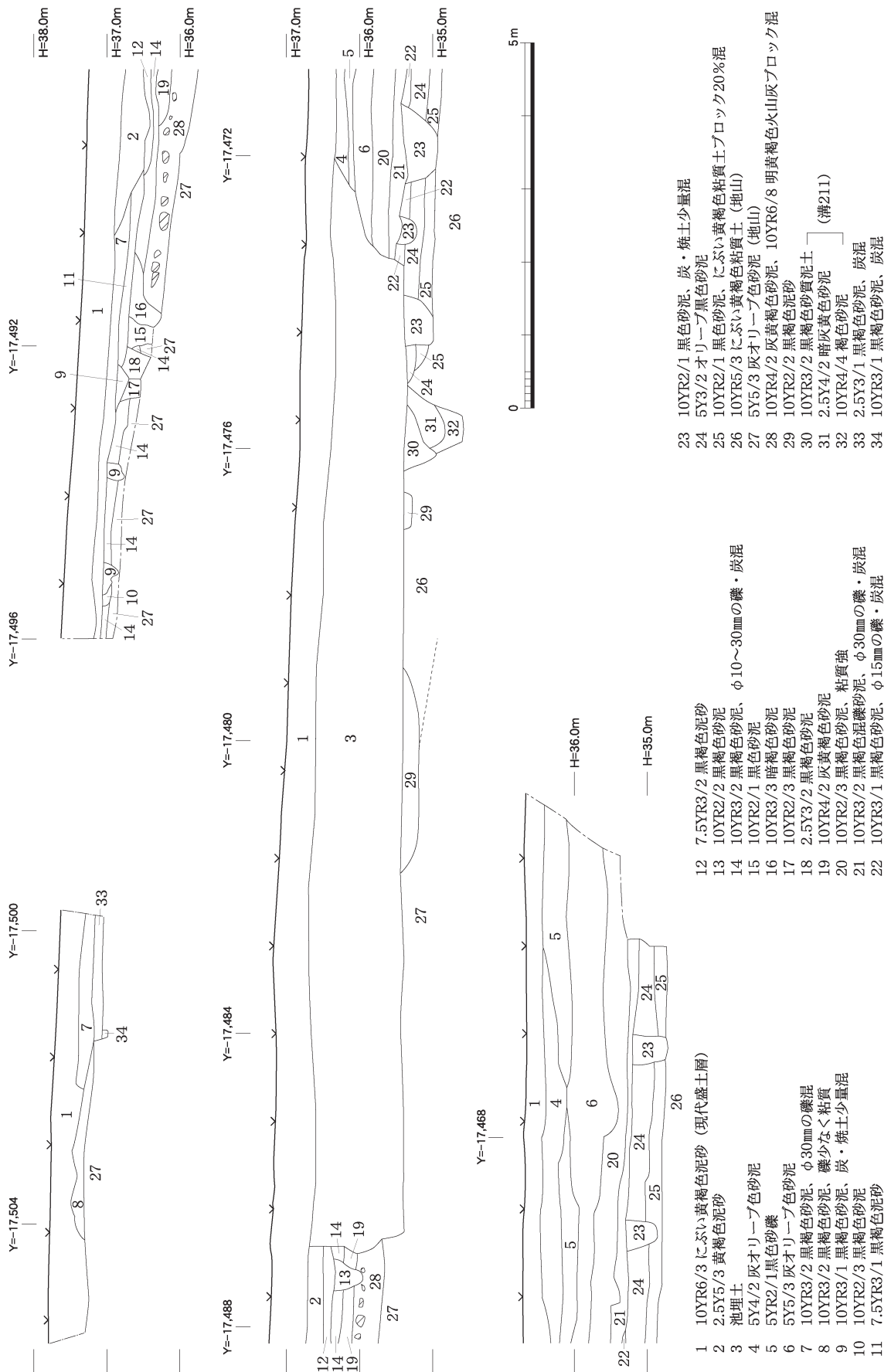
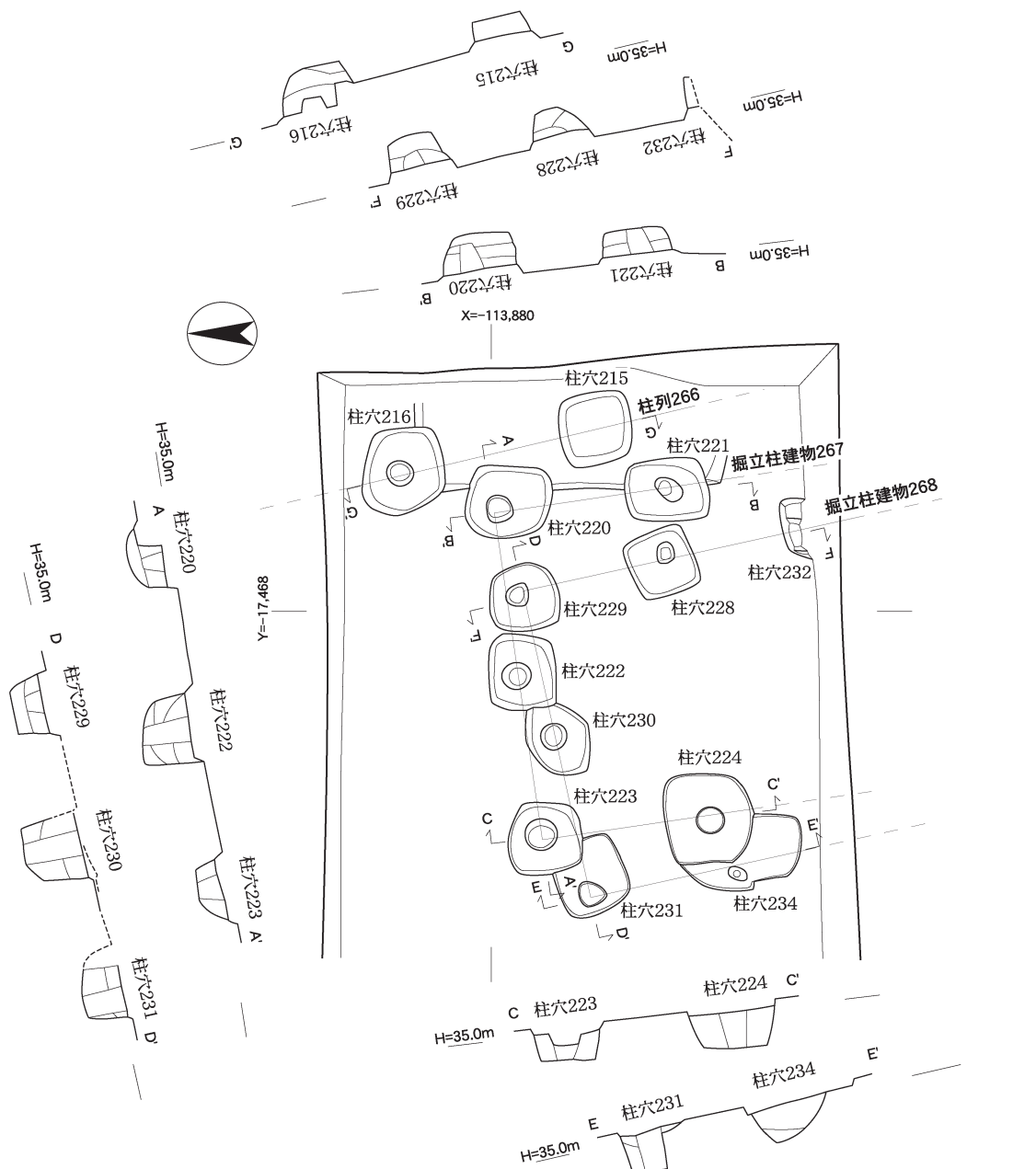


図6 北壁断面図 (1 : 80)



- 柱列266**
 柱穴215 掘形 10YR2/2 黒褐色砂泥 (10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック混)
 柱穴216 掘形 上層 10YR2/1 黒色砂泥
 中層 10YR2/2 黒褐色砂泥 (10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック混)
 下層 10YR2/2 黒褐色砂泥 (2.5Y6/2 灰黄色砂泥ブロック混)
- 掘立柱建物267**
 柱穴220 柱当り 10YR2/3 黒褐色砂泥
 掘形 上層 10YR2/2 黒褐色砂泥 (5Y6/4 オリーブ黄色砂泥ブロック混)
 中層 10YR2/2 黒褐色砂泥や粘質
 下層 10YR3/2 黒褐色砂泥 (2.5Y6/2 灰黄色粘質土ブロック混)
 柱穴221 柱当り 10YR2/3 黒褐色砂泥
 掘形 上層 10YR2/2 黒褐色砂泥 (5Y6/4 オリーブ黄色砂泥ブロック混)
 下層 10YR3/2 黒褐色砂泥 (2.5Y6/2 灰黄色粘質土ブロック混)
 柱穴222 柱当り 10YR2/3 黒褐色砂泥
 掘形 上層 10YR2/2 黒褐色砂泥 (5Y6/4 オリーブ黄色砂泥ブロック混)
 中層 10YR3/2 黒褐色粘質土 (10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック混)
 下層 10YR3/2 黒褐色砂泥 (2.5Y6/2 灰黄色粘質土ブロック混)
 柱穴223 柱当り 10YR2/3 黒褐色砂泥
 掘形 上層 10YR2/2 黒褐色砂泥 (5Y6/4 オリーブ黄色砂泥ブロック混)
 中層 10YR3/2 黒褐色粘質土 (10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土ブロック混)
 下層 10YR3/2 黒褐色砂泥 (2.5Y6/2 灰黄色粘質土ブロック混)
 柱穴224 柱当り 10YR2/3 黒褐色砂泥
 掘形 上層 10YR2/2 黒褐色砂泥 (5Y6/4 オリーブ黄色砂泥ブロック混)
- 掘立柱建物268**
 柱穴228 掘形 上層 10YR2/2 黒褐色砂泥
 中層 10YR2/3 黒褐色砂泥 (5Y6/2 灰黄褐色粘質土ブロック混)
 下層 10YR2/3 黒褐色砂泥
 柱穴229 柱当り 10YR2/2 黒褐色砂泥
 掘形 上層 10YR2/3 黒褐色砂泥 (5Y6/2 灰黄褐色粘質土ブロック混)
 下層 10YR2/3 黒褐色砂泥
 柱穴230 柱当り 10YR2/2 黒褐色砂泥
 掘形 上層 10YR2/3 黒褐色砂泥 (5Y6/2 灰黄褐色粘質土ブロック混)
 下層 10YR2/3 黒褐色砂泥
 柱穴231 柱当り 10YR2/2 黒褐色砂泥
 掘形 上層 10YR2/3 黒褐色砂泥 (5Y6/2 灰黄褐色粘質土ブロック混)
 下層 10YR2/3 黒褐色砂泥
 柱穴232 掘形 10YR2/3 黒褐色砂泥 (5Y6/2 灰黄褐色粘質土ブロック混)
 柱穴234 掘形 上層 10YR2/3 黒褐色砂泥 (5Y6/2 灰黄褐色粘質土ブロック混)
 下層 10YR2/3 黒褐色砂泥

図7 掘立柱建物 267・268、柱列 266 実測図 (1 : 80)

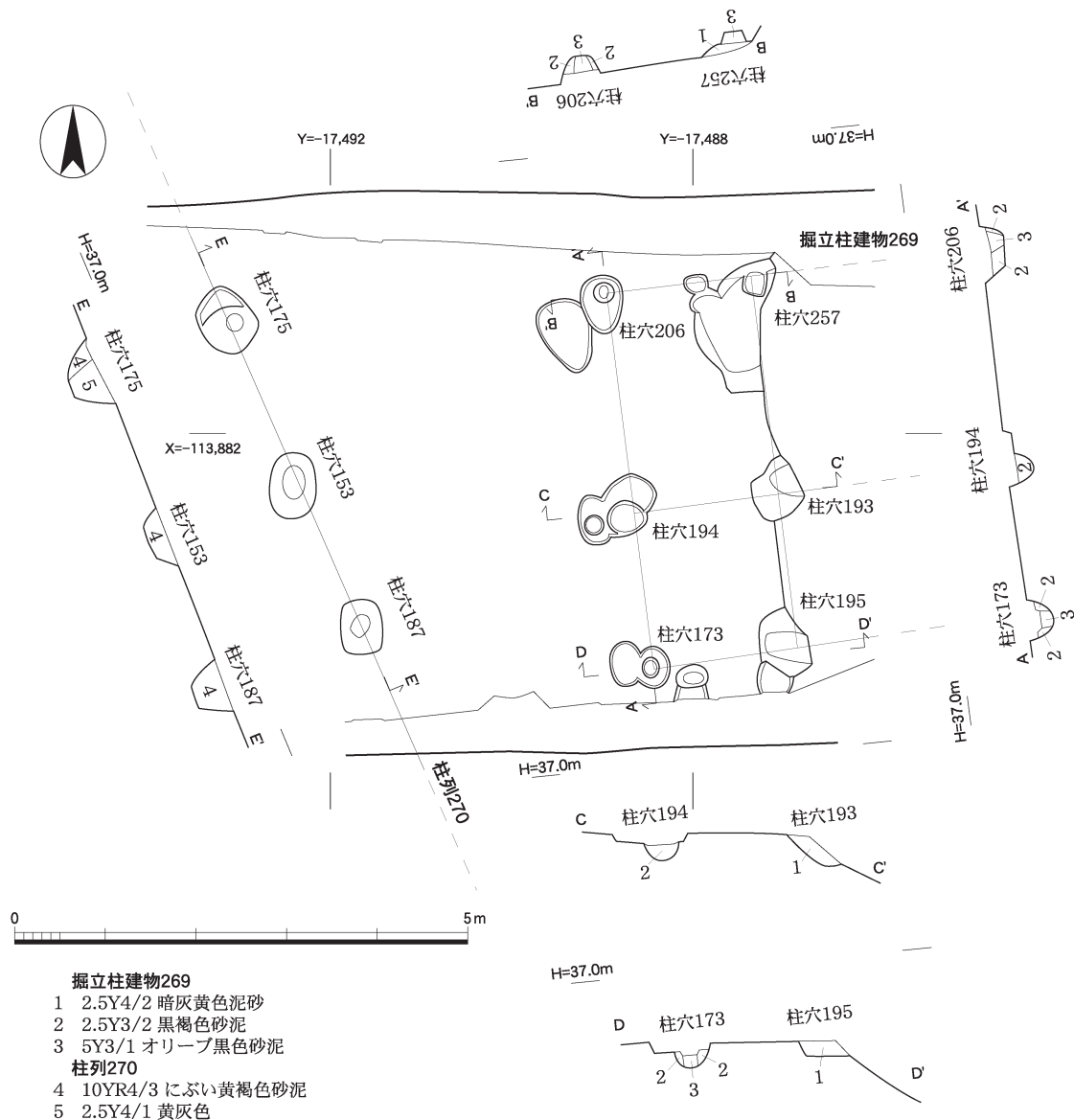


図8 掘立柱建物 269、柱列 270 実測図 (1 : 80)

れる掘立柱建物 4 棟、柱列 2 条、溝 1 条がある。

溝 211 (図版 2) 北に対して西に約 10° 振れる方向の南北溝。検出面での幅・深さともに 1 m を測る。逆台形を呈し、底部は平坦である。埋土は大きく 3 層に分けることができ、中層の暗灰黄色砂泥層からは小破片の土師器が多く出土した。

掘立柱建物 267 (図 7) 東西トレンチ東端で検出した。東西 2 間 (4.2 m)、南北 1 間 (2.1 m) 以上の建物で、柱間は 2.1 m 等間である。方位は北に対して西に約 6° 振れる。柱穴掘形は一辺 0.8 ~ 1 m の方形を呈し、検出面からの深さ 0.4 ~ 0.75 m ある。掘立柱建物 268 と重複し、柱穴 222 と柱穴 230、柱穴 223 と柱穴 231 の重複関係から掘立柱建物 267 が新しい。各柱穴掘形からは縄文土器が少量出土している。

掘立柱建物 268 (図 7) 東西トレンチ東端で検出した。東西 2 間 (3.6 m)、南北 2 間 (3.6 m) 以上の掘立柱建物。柱間は 1.8 m 等間である。掘立柱建物 267 と重複しており古い。方位は北に

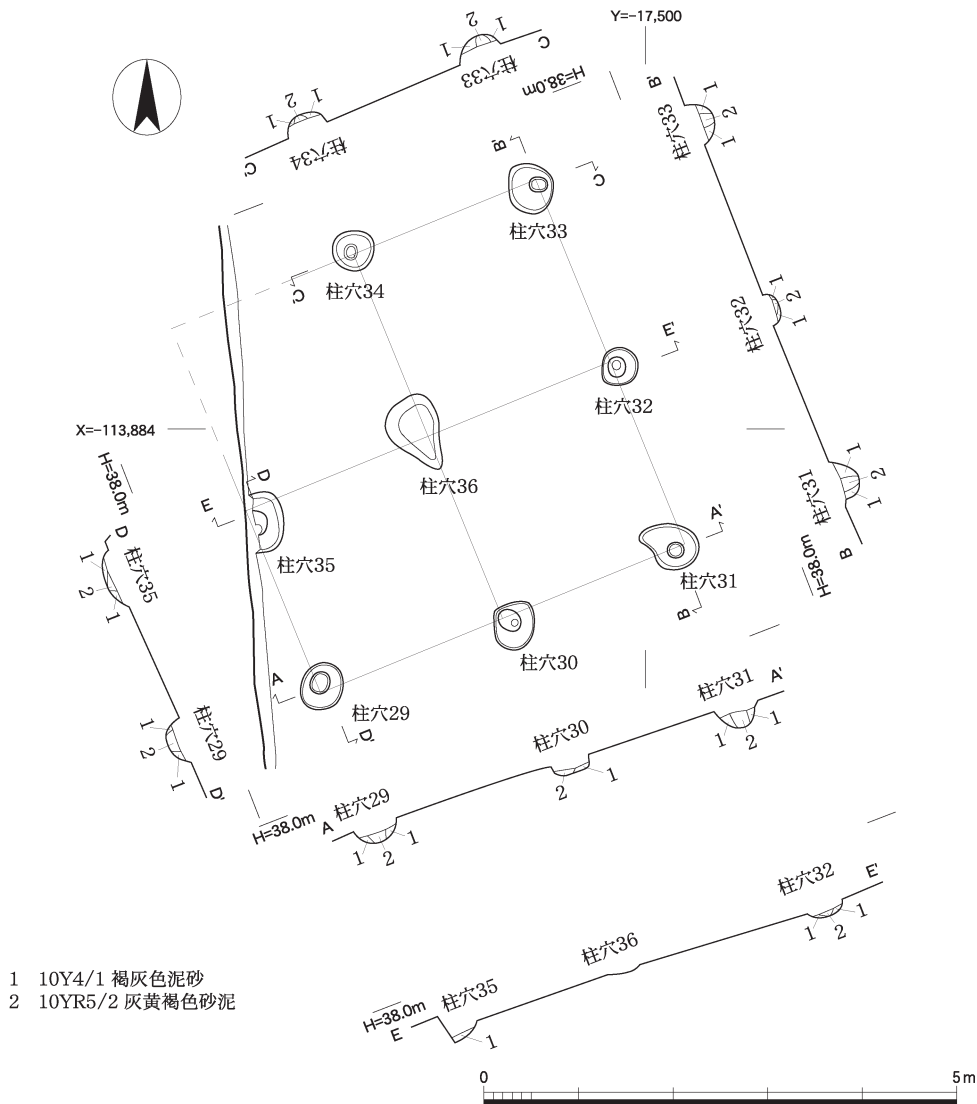


図9 掘立柱建物 77 実測図 (1 : 80)

対して西に約 13° 振れる。柱穴掘形は一边 0.65 ~ 0.75 m の方形を呈し、検出面からの深さ 0.45 ~ 0.65 m を測る。各柱穴掘形からは縄文土器が少量出土している。

柱列 266 (図 7) 東西トレンチ東端で検出し、南北に 1 間分を確認した。柱間は 2.4 m あり、方位は北に対して西に 10° 振れる。柱穴 216 は一边 1 ~ 1.2 m の不整形方形を呈し、深さ 0.55 m を測る。柱穴 215 は攪乱坑の底部で検出したため、柱穴の基底部を確認したに留まるが、一边 0.8 m を測る。大型の柱穴であることから調査区東側に展開する掘立柱建物に伴う柱穴とみられる。

掘立柱建物 269 (図 8、図版 3) 東西トレンチの西側で検出した。東側は池により削平される。南北 2 間 (4.2 m)、東西 1 間 (1.8 m) 以上の掘立柱建物。南北方向の柱間は北から 2.4 m、1.8 m である。方位は北に対して西に 7° 振れる。柱穴掘形は径 0.4 ~ 0.6 m の円形を呈し、検出面からの深さ 0.35 ~ 0.4 m ある。

柱列 270 (図 8) 2 間分を検出した。柱間は 1.8 m 等間で、掘形は一边 0.5 ~ 0.6 m の方形を呈し、検出面からの深さは 0.25 ~ 0.35 m ある。方位は掘立柱建物 77 に平行し、北に対して西に 24°

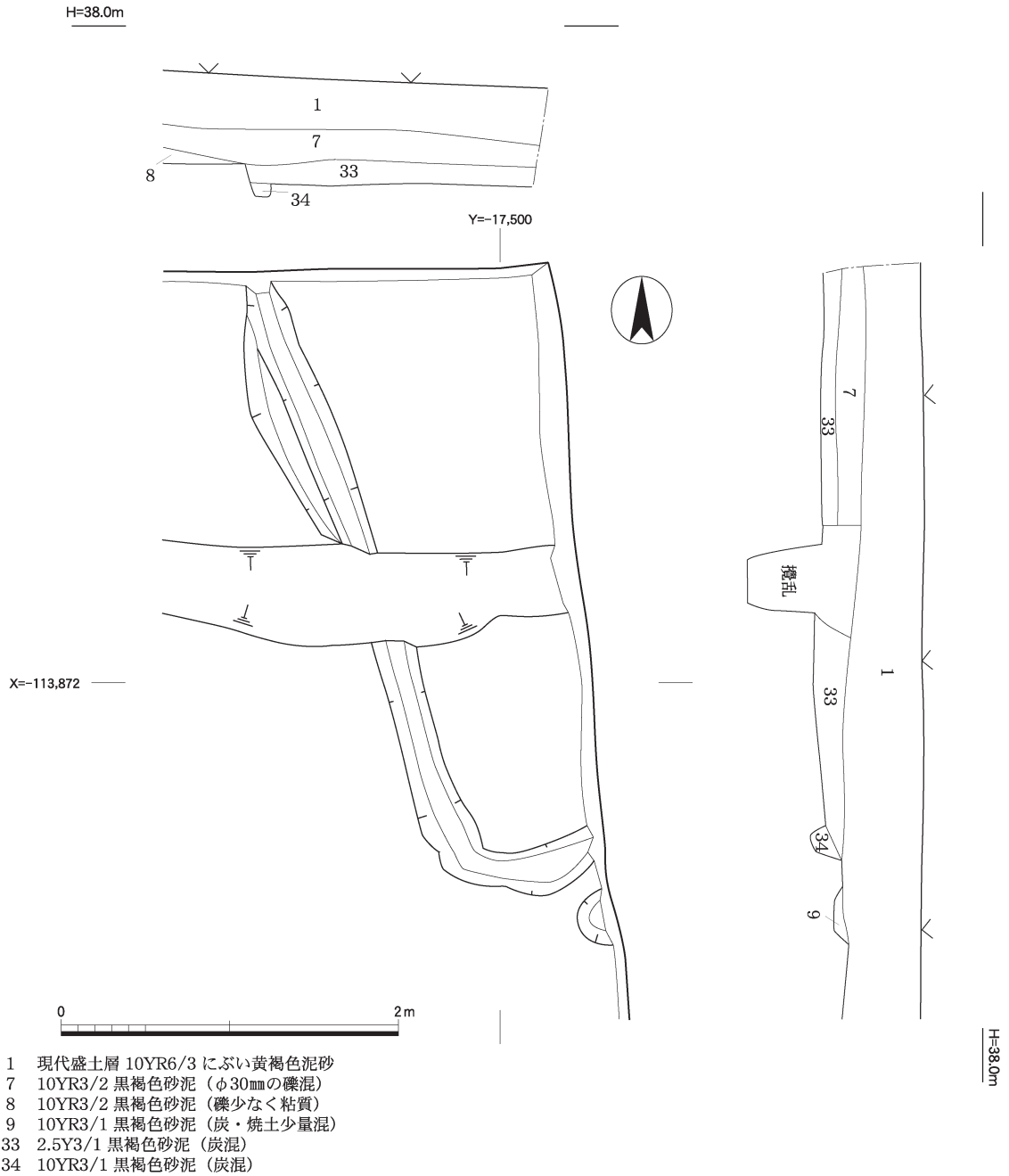


図 10 竪穴住居 99 実測図 (1 : 40)

振れる。

掘立柱建物 77 (図 9、図版 1) 南北トレンチのほぼ中央で検出した。2 間×2 間の総柱建物になるとみられるが、北西隅の柱穴 1 基は調査区外になる。柱間は 2.1 m 等間である。方位は北に約 24° 振れる。柱穴掘形は円形または不定形で直径 0.4 ~ 0.65 m を測り、上部を削平されているため深さは 0.15 ~ 0.2 m である。

竪穴住居 99 (図 10、図版 3) 南北トレンチ北部で検出した。検出面から床面までの深さ 0.12 ~ 0.15 m、壁溝の幅 0.25 m、深さ 0.07 m を測る。住居は南西部の一部を調査したに留まり、柱穴・炉または竈などの竪穴住居に伴う施設は検出していない。床面は部分的に黒色粘質土と灰オ

リープ色砂泥の混土層により貼床状に堅く締った箇所がみられた。

出土遺物は少なく小破片のものであるが、樋口縁部と移動式竈の破片が出土している。

4. 遺物

遺物は整理箱に7箱出土したが、ほとんどが小破片で器面が磨滅したものが多く、土器類では各時期のものすべてが接合・復元が困難なものであった。また、今回の調査では、遺構や包含層でまとまって出土することはなく、遺構からの出土遺物も、遺構の時期を時期を確定できる資料は少なかった。

出土遺物の内容は土器類では、縄文時代後期から晩期の深鉢、弥生時代後期から古墳時代初期の甕、古墳時代後期の須恵器杯・樋・甕、奈良時代の土師器杯・甕、平安時代の土師器杯・甕、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器皿、平安時代後期から鎌倉時代の土師器皿がある。土製品では古墳時代の移動式竈がある。石製品には縄文時代の石錘・凹石・剥片石器と、弥生時代の石斧がある。

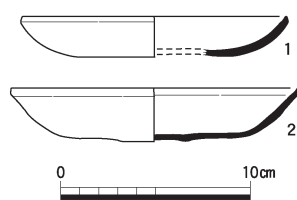


図 11 溝 211 出土土器実測図 (1 : 4)

溝 211 出土土器 (1・2) (図 11) 土師器、須恵器、灰釉陶器などがある。出土した土器には奈良時代から鎌倉時代初期までの時期差がある。すべて小破片であるが実測可能な破片で出土遺物中最も新しい時期にあてられる土師器 2 点を図示した。ともに皿で、1

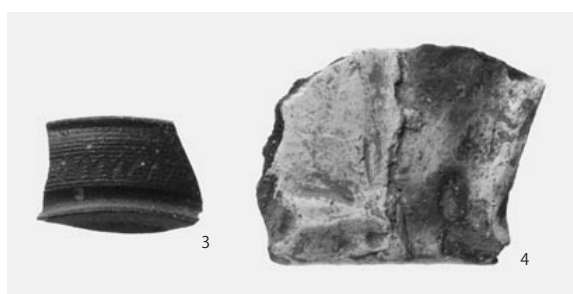


図 12 竪穴住居 99 出土土器

は口径 15.2 cm、器高 2.7 cm を測る。胎土は灰黄褐色を呈し精良。2 は口径 14.0 cm、器高 2.0 cm を測り、胎土は浅黄橙色を呈し精良である。口縁端部は上方に立ち上がり、平安時代後期から鎌倉時代とみられる。

竪穴住居 99 出土土器 (3・4) (図 12) 3 は須恵器 樋 の口縁部とみられる。小破片で復元

表 2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器、石製品		石製品 2 点		
弥生時代	弥生土器、石製品		石製品 2 点		
古墳時代	土師器、須恵器、土製品		須恵器 1 点、土製品 1 点		
奈良時代	土師器				
平安時代 ～鎌倉時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、 灰釉陶器		土師器 2 点		
合計		7 箱	8 点 (1 箱)	1 箱	5 箱

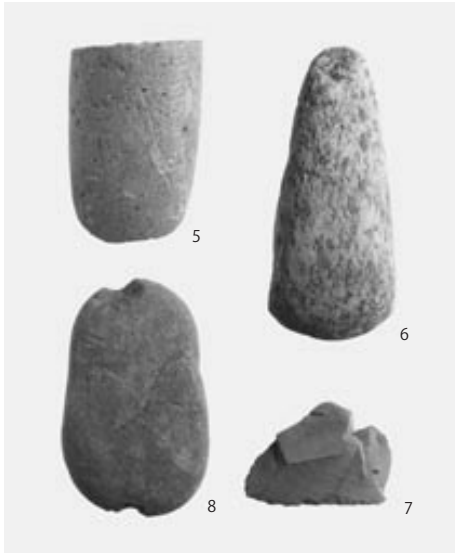


図 13 石製品

径をだすことができず図化しなかったが、遺構の時期を表す遺物とみられることから写真を掲載した。口縁端部は内傾しシャープさにかける。外面下端に一条の稜線を巡らし、その上に幅 0.8 cm の櫛描波状文を施す。4 は土師質の

移動式竈の破片とみられる。5 は陶器 TK47 型式に属するとみられる。

石製品(5~8)(図 13・14) 5・6 は弥生時代に属するとみられる磨製石斧。ともに石材は不明。

7 は縄文時代の剥片石器である。刃部に、使用による剥離がみられる。サヌカイト製である。

8 は石錘。長軸の両端に表裏ともに打ち掻き抉りを入れる。石材は不明。重量は 160 g ある。

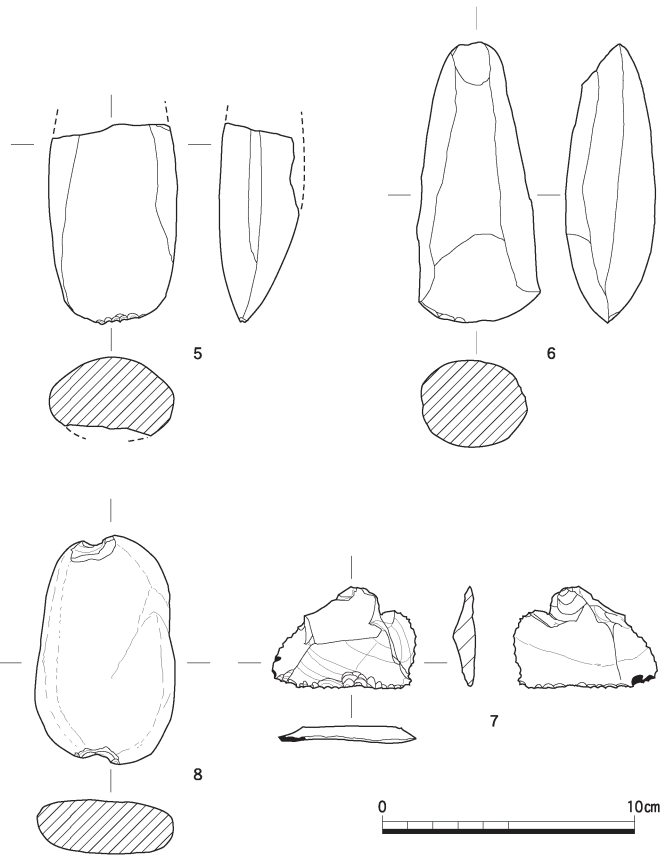


図 14 石製品実測図(1:3)

5. ま と め

今回の調査では、竪穴住居 1 棟、掘立柱建物 4 棟、柱列 2 条、溝 1 条を確認した。これらの遺構のうち、竪穴住居 99 は出土遺物から 5 世紀末から 6 世紀前半。溝 211 は出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代初期にあてられる。段丘上で検出した掘立柱建物 77、柱列 270 は時期を特定する遺物の出土はないが、建物の振れが、竪穴住居 99 と同方位の振れであり、同時期とみられる。

調査区東端で検出した掘立柱建物 267・268、柱列 266 は柱穴掘形からの出土遺物は縄文時代・弥生時代の土器・石器などで、時期を特定できるものはなく、遺構の方位の振れも異なっている。これらの建物群の西で検出した溝 211 は、その西側の段丘上からの雨水などの排水を考慮した溝と考え、掘立柱建物群と同時期とみるのが妥当と考えられ、平安時代後期から鎌倉時代であろう。

掘立柱建物 269 は時期を判断できる資料が無く時期は不明である。

周辺の既往の調査では、調査地の東に接する市道御陵六地藏線（通称西野道）の拡幅工事に伴い、調査地の南約 150 m の地点で発掘調査⁴⁾を実施しており、平安時代中期の掘立柱建物を検出している。また、調査地の西側の台地上部でも、市営住宅の改築に伴い発掘調査⁵⁾を実施し、平安時代から室町時代の建物群を検出している。今回検出した掘立柱建物 267・268、柱列 266 の規模や構造は、調査区が狭く不明な点が多いが、柱穴の掘形からみると大型の建物になると思われ、既往の調査成果と今後の近隣での調査の進捗を合せて、遺構の性格を分析していく必要がある。

註

- 1) 田辺昭三他「山城国の展開」『京都の歴史』第 1 巻 1970 年
- 2) 洛東高校郷土クラブ「中臣遺跡」文化祭資料（ガリ版印刷）1972 年
- 3) 中臣遺跡調査団「中臣遺跡 1973」『京都市埋蔵文化財年次報告 1973- III』1974 年
中臣遺跡調査団「中臣遺跡 1974」『京都市埋蔵文化財年次報告 1974- III』1975 年
- 4) 鈴木廣司・網 伸也「中臣遺跡 77 次調査」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000 年
東 洋一「中臣遺跡 80・81 次調査」『平成 12 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 5) 内田好昭・高橋 潔・平片幸雄「中臣遺跡 73 次調査」『平成 6 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
内田好昭・高橋 潔「中臣遺跡 74 次調査」『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997 年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかとみいせき							
書名	中臣遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-8							
編著者名	菅田 薫							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかとみいせき 中臣遺跡 (83次調査)	きょうとしましなく 京都市山科区 ひがしのふたいちょう 東野舞台町 97番6	26100	632	34度 58分 24秒	135度 48分 31秒	2006年6月 19日～2006 年7月24日	400㎡	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中臣遺跡 (83次調査)	集落跡	縄文時代		縄文土器、石製品				
		弥生時代		弥生土器、石製品				
		古墳時代	竪穴住居、掘立柱 建物、柱列	土師器、須恵器、土製 品				
		奈良時代		土師器				
		平安時代 ～鎌倉時代	溝、掘立柱建物、 柱列	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器				
		時期不明	掘立柱建物					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-08

中臣遺跡

発行日 2006年9月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961